Crimson Joy

ロバート・B・パーカー／菊池光＝訳

真紅の歓び

真紅の歓び

ロバート・B・パーカー
菊池 光訳

Hayakawa Novels

CRIMSON JOY
by Robert B. Parker
Copyright © 1988
by Robert B. Parker
First published 1989 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
The Helen Brann Agency, Inc.
through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

検印
廃止

真紅の歓び

1989年3月31日　初版発行
1989年4月30日　3版発行

著　者　R・B・パーカー
訳　者　菊池　光
発行者　早川　清

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(大代表)
振替　東京・6-47799

印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社

ISBN4-15-207656-9 C0097

真紅の歓び

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1989 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わが一家に捧げる——

1

ジャメイカ・プレインのシェリダン通りは、センター通りから二百ヤードほど上って頂上に達し、今度はチェスナット街に向かって下っている。狭い通りで、両側に二、三家族用の羽目板張りの家が並んでいる。家の多くはアパートに改造されていて、アパートの多くは学生か卒業したばかりの連中が住んでいる。それ以外の住人はネクタイなしで働く人たちだ。

三月初めの陽の輝く寒い日、排気ガスと煤で黒ずんだ砂まじりの雪の固い小山が冬のみじめな名残りをとどめている。

フランク・ベルソンが、氷のかたまりが散乱している歩道に車を乗り上げて駐車した。警官が好むやり方で、斜めに停めた車の後尾が通りの中ほどまで突き出ている。すでに同じやり方でパトカーが二台停まっていた。

私たちの前の家は表に小さなポーチが付いていてドアが二つある。かなり前に薄い緑色に塗ってある。検屍官のワゴンが細い車道に入っていて、立入禁止の黄色いテイプが家の両端の歩道に張ってあ

る。ほとんど女と小さな子供ばかりの近所の住人が通りの向かい側に立っている。男が働き、女が家にいる区域だ。

ベルソンはオーバーの襟にバッジを留めていた。戸口の制服警官がバッジを見てうなずき、私の襟を見た。

「彼は大丈夫だ」ベルソンが言った。

「いいですよ」警官が言い、私たちは彼の横を通って家に入った。玄関の間に、二階のアパートに通じる階段があって、左側の開いているドアの向こうは一階のアパートの居間になっている。中で数人の警官が写真を撮ったり、辺りを見回している。部屋の中央に、コートを着たまま腕を組んで、マーティン・クワークがいた。死体を見下ろしていた。

「スペンサーです、警部補」ベルソンが言った。

クワークが私の方を見ないでうなずいた。相変わらず死体を見下ろしている。私も見た。

私たちが見ているのは、四十から四十五くらいの黒人女性だった。裸で、物干し綱のような物で両手、両足を縛られ、口にテイプが貼ってあって、どんよりした褐色の目が虚ろに宙を見つめている。両股の間に血が付いており、体の下のフックトラグが血で黒ずんでいる。乳房の間に赤いバラが一本のっていた。

「またか」私が言った。

クワークが死んだ女を見つめたまま、また黙ってうなずいた。感情を全く示していない。ベルソンは戸口に行って柱に寄りかかり、小さな安葉巻きの包み紙をむいてポケットに入れた。湿らすために

葉巻きを一度口に入れて出すと、親指の爪ですった台所用マッチで火をつけた。葉巻きの先が赤くなると、マッチを吹き消してそれもポケットに入れた。ほかの警官はそれぞれの仕事に専念している。私がこんな所で何をしているのか、と訊く者はいなかった。何を見ているのか、とクワークに訊く者もいない。部屋は重苦しい静けさに包まれていた。

クワークが私の方へぐいっと首を倒し、「フランク」と言うと、部屋を出た。私がついて行くと、ベルソンが柱から体を押し離して私に続き、家を出て石段を下り、三人でベルソンの車へ行った。クワークと私が後ろの座席に坐った。

「ジャメイカウェイを行ってくれ、フランク」クワークが言った。「池のまわりを走れ」

ベルソンが狭い道を慎重に下って二度ほど左折し、ジャメイカウェイに出た。クワークが私の横で座席に寄りかかり、ごつい手を頭の後ろで組んで外を見ていた。ポプリンのレインコートの前を開けており、茶色のハリス・ツイードの上衣、ボタン-ダウン・カラーの紺のオックスフォードのシャツに黄色いニット・タイを締めている。上衣のポケットは見えなかったが、飾りハンカチはネクタイの色と合ったものであるのが判っていた。

「新聞は早くも、彼を赤バラ殺人鬼と呼んでいる」クワークが言った。

「あるいは、彼女」

「男だ」クワークが言った。「どの殺人現場にも精液の跡が残っている」

「現場に?」私が言った。

「そうだ。女の体内には一度も残っていない。今度のはラグに、一度は女のもも、一度はソファに」

「手淫」私が言った。
「たぶん」クワークが言った。
「前、それとも後で？」
「判らん」クワークが言った。
ベルソンは、ジャメイカ・ポンドを左にしてジャメイカウェイを中心部に向かって走っていた。右手、池の反対側で、堂々とした大きな家々が薄い春の陽光を浴びている。家はどれも以前ほど堂々とした感じはなく、その多くはいろいろな施設になっている——私立学校、いろいろな宗教、老人ホーム。分譲マンションも何軒かある。
「警官かもしれん」クワークが言った。
「たまげたな」私が言った。
クワークが窓からこちらへ顔を向けて私を見た。うなずいた。
「奴がおれに手紙をよこした」クワークが言った。オーバーの内ポケットから封筒を出して私の方へ差し出した。どこのドラッグストアでも売っているようなありふれた白封筒だ。タイプで、クワークの自宅のマーティン・クワーク宛てになっている。差出人の住所はない。私は封を開いた。中の紙も封筒同様にありふれたものだ。同じタイプで次のような内容だった——

クワーク、
おれはあの売春婦とウェイトレスを殺した。おれを早くつかまえた方がいい。またやるかもし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れないし、おれは警察官だ。

私はもう一度封筒を見た。三日前のボストンの消印が押してある。
「奴はあんたの家の住所を知ってる」私が言った。
「電話帳に載っている」クワークが言った。
「それでも、調べる手間はかけたわけだ」私が言った。「住所を知っていることを、あんたに知らせたいんだ」
「そうだ」
「いつこの手紙を受け取ったんだ？」
「二人目の殺人の後だ」
ベルソンがブルックライン街で赤の信号を突っ走り、リヴァウェイに出た。
「警官の誰でだってありうる」私が言った。
「その通り」
「今あそこにいる鑑識課の連中の一人かもしれない」
「その通り」
「捜査を混乱させようとしている一般市民かもしれない」
「その通り」
「だから、あんたは誰も信頼できなくなる」

「一人も」
「ベルソン以外は」
クワークがうなずいた。私は彼を見てにっこり笑った。人なつっこい大きな子犬だ。クワークは何も言わないで私を見ていた。ベルソンの葉巻きが、誰かがネズミを煮ているようなにおいを放っている。
「警部補、おれはあんたにいろいろと借りがある」私が言った。
クワークは相変わらず何も言わないで私を見ていた。
「だから、この件であんたの手助けをするよ」
クワークがうなずいた。「そう。お前さんがやりたければ」
ベルソンがまたブルックライン街に達して右折した。
「情報その他、すべて見せる」クワークが言った。「何か見つけたら、おれかベルソンにだけ話してくれ」
「これまで、何が判ってるんだ?」私が言った。
「女三人、みな黒人、みな同じ方法で殺されている、お前さんが見た通りだ。性的に犯した証拠はない。どの場合も近くに精液の跡がある。同じような綱で縛り、同じような灰色の布テイプで口を塞いでいる。今度のはまだ弾を取り出していないが、初めの二人とも・三八口径で撃たれている」
「黒人で女性という以外に、何か共通点は?」
「あるかもしれん」クワークが言った。「一人は売春婦、一人はゾゥンのある店のカクテル・ウェイ

トレスだった」
「今度のは？」
「まだ判らん。郵便配達が表の窓から彼女を見て通報した。ドロゥリス・テイラーという名前だった」
「今でもそうだ」私が言った。
「そうだな」
「おれはどの程度公式に動けるんだ？」
「お前さんはおれのために調べている」クワークが言った。「協力しない者がいたら、おれに知らせろ」
「新聞はどうなんだ？」
「秘密にしておくことはできない。連中はお前に気づく。彼らは、ごみの缶に取り付いた犬のようにこの一件にくっついている」
「まだ中傷記事は出ていないのか？　ごみ箱に取材されないと、大物とは言えないよ」
クワークが冷ややかな笑みを浮かべた。「連中は来てる。絶えず奴らの風上にいるよう心がけるんだな」
「このことに関して、あんたとおれとベルソン以外に誰か関わってるのか？」
「公式の捜査は続けられるし、そちらで事件を解決するかもしれない。しかし、犯人が警察に関係のある人間かどうか、おれは知りようがない。署以外で、やっていないことが判ってる人間が必要なん

だ」
「そんな親切な文句、初めて聞いたよ」
チルドレンズ・ホスピタルの近くの信号でベルソンが車を停めた。信号が変わって、病院を通り過ぎ、ジャメイカウェイにのった。
クワークが言った、「おれが今話したこと以外、何一つ判っていない。ほかに具体的な証拠はない。鑑識に精液の分析をやらせるが、何も判らないはずだ。それからたどって調べてゆくことはできない。初めの二件について指紋は採れなかったし、今度のを調べ終わっても出ないはずだ。どの女も自分の家で殺されている。初めの売春婦は、ブライトンのファナル団地の中で、二人目は病院の近くのラグルズ通りだ」
「誘って一緒に家へ行って、殺した」私が言った。
「あるいは、家までつけて行って」クワークが言った、「拳銃を突きつけ、むりやり入り込んで殺した」
「手当たり次第に入り込んで三回とも黒人女性だった可能性は薄いから、行き当たりばったりに侵入したとは考えられないんだな」
「ラグルズ通りでは、黒人と予測できるが、ブライトンではそうは言い切れないし、今度の場合はもっと予測できない」クワークが言った。
「それに、犯人はたぶん白人だな」
「そう、おれたちはそう考えている。犯人は黒人女性を狙っているが、女を見つけるのに黒人街へは

行きたくない。ラグルズ通りですら、あの端のあたりは白人と黒人居住区の接点だ。犯人は、夜中に黒人居住区に入って行くのが怖いか、自分が目につきやすい、と考えているのだろう」

ベルソンがパーキンズ通りに出た。

「で、あの手紙は？」

「鑑識はあの手紙から何一つ手がかりを得られなかった」クワークが言った、「鑑識で調べた人間が犯人なら話はべつだが」

「別々の専門家に二度調べさせればいい」

「それで、どちらかの報告が間違っていたら、そいつが容疑者だ」クワークが言った。「やってみたよ。テストの結果は同じだった」

「とすると、鑑識は手紙のことを知ってるわけだな」私が言った。

「ということは、やがて署全体が知る。秘密にしておけ、とみんなには言ってある。しかし、そうはいかない。いずれ外部に漏れる」

「となると、やがて、犯人が警官であるか、その可能性があることをみんなが知る」

「士気に悪影響を及ぼすが、あの手紙を調べないわけにはいかなかったのだ」

「あんただけが知ってることはあるのか？」

ベルソンが、シェリダン通りの家の前に、前と同じように車を停めた。

「ない」クワークが言った。「新聞は精液のことは知らないが、署の者は知っている、ということは、いずれ新聞が知る」

「秘密を守るのは困難だな」
「不可能だ。警官が家に帰って女房に話す。ソフトボールの試合の後でビールを飲みながら仲間に話す。だいいち、おれだって女房に話す。お前はスーザンに話す」
「しかし、彼女は人には告げない」
「もちろん、そうだ。おれやベルソンその他、誰の女房も話さない。しかし、一週間かそこらたつと、《ボストン・グロゥブ》に載って、第五チャネルが撮影班を送り出している」
「そんなに若いのに、ずいぶん皮肉な見方をする」
クワークはまだ窓の外を見ていた。「おれはこの一件はあくまで自分で担当するつもりだ」彼が言った。「犯人はやめないし、事件は北部のマルディ・グラになる。トーク・ショウ、テレビ、新聞、《タイム》、《ニューズウィーク》、市長、知事、市議会、女性解放論者、人種差別主義者、黒人、FBI、それぞれの被害者の住所が選挙区になっている州議会議員、ミシシッピ川の東の馬鹿者全員、この事件に首を突っ込んで捜査の邪魔をし、犯人にまたやる気を起こさせる」
「この男はあんたにつかまえてもらいたがっている」私が言った。
「そうかもしれん、そうでないかもしれん、両方かもしれない」
前のベルソンがこちらを向いて、背当ての上に腕をのせた。細い葉巻きが途中まで燃えて消えていたが、相変わらず噛みしめている。
「どっちにしても、おれたちは、独自の捜査グループが必要なんだ」毛が濃いので肉の薄い顔の顎のあたりが青みをおびている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com